幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

育児への積極的関与に影響する家族要因に関する研究

主任研究者　岡　本　祐　子(広島大学教育学部助教授)

論文要旨　本分担研究は、母親が育児に積極的に関与し、かつ子供のみならず親の側の発達を促進させる家族要因について検討した。

幼児の健康な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは、必須の要件である。しかしながら、今日、母親役割の受容や育児への積極的関与ができない母親の増加が指摘されている。その背景のひとつに、幼児をもつ母親のアイデンティティ葛藤があると仮定し、母親役割の受容を、母親の「個としてのアイデンティティ」と「母親アイデンティティ」の統合・葛藤という視点からとらえて、母親役割受容と育児への積極的関与、家族関係の関連性を検討した。幼児をもつ 147 名の母親を対象に質問紙調査を行ったところ、統合型、伝統的母親型、独立的母親型、未熟型の４つのタイプが見出された。そのうち、統合型の母親は、個としての自分と母親としての自分が最も調和・統合しており、家族関係も適応的であった。母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、特に夫との関係が重要であること、つまり夫の物理的な育児・家事のサポート以上に、夫が育児に関心をもち、妻を心理的にサポートしていくことの重要性が示唆された。

また、育児による親の側の成長・発達感を、育児への積極的関与を促進し、心理的に望ましい保育環境を形成していくための重要な基盤の一つととらえ、これを支える家族要因について分析した。

■　問題および目的

少子化・長寿化にともなうライフサイクルの変化によって、親にとっての子育ての意味も再認識されるようになってきた。つまり、子育ては、親が子供の成長・発達を援助するのみでなく、子育てによって親の側も成長・発達をとげるという、相互発達的な営みであるという見方である。この問題は、我が国では古くから「育児は育自」として、経験的に認識されてきたが、これを実証的に検証した研究として、柏木・若松(1994)，牧野(1996)などが見られる。

子供の健全な情緒発達にとって、家庭が心理・社会的に健全な保育環境であることは必須の要件であるが、子供の養育者である母親・父親が自ら、成長・発達感を体験できていることは、育児への積極的関与を促進し、心理的に望ましい保育環境を形成していくための基盤であると考えられる。しかしながら、すべての親が子育てに積極的に関与し、このような発達感を獲得できているわけではない。そこで本研究は、育児への積極的関与を促進する基盤として、親の側の成長・発達感をとらえ、これを支える家族要因について分析した。つまり、父親・母親の育児による発達を支える要因として、親役割の受容、夫婦の調和性、父親の育児参加の程度、母親の職業観、の４つを仮定し、親の側の発達との関連性を検討することを目的とした。

■　方　法

１．調査対象者

３　５歳の幼児をもつ夫婦　91 組、合計 182 名。母親の就労形態は、フルタイム 16 名、パートタイム 14 名、専業主婦 61 名であった。

２．手続き

以下の内容からなる質問紙調査を行った。

①親となることによる発達：柏木・若松(1994)による「親となることによる変化・発達に関する調査」49 項目。これらの項目は、柔軟性、自己抑制、視野の広がり、運命・伝統・信仰の受容、生きがい・存在感、自己の強さの６因子から構成されている。

②母親の職業観(母親のみに質問)：表１に示した職業をもつ理由、またはもたない理由、それぞれ８項目の中から複数回答で選択させた。

③夫婦の調和性：数井ら(1996)による「結婚適応尺度」"The Marital-Dyadic Adjust-ment Scale"(MDAS)日本版 19 項目.

④親役割の受容：大日向(1988)の「母親役割の受容に関する項目」12 項目。これらの項目は、積極的・肯定的意識６項目，および消極的・否定的意識６項目のサブカテゴリーから構成されている。父親には、これを一部、修正

して用いた。
⑤父親の育児・家事参加：柏木・若松(1994)を参考に、８項目を作成した。

３．結果の整理:
1)親となることによる発達：49 項目各々につき、「とてもあてはまる」(5 点)「全くあてはまらない」(1 点)として得点化し、総得点および各々の因子の得点を算出した。
2)夫婦の調和性：数井ら(1996)のマニュアルに従って、夫婦の調和性の総得点およびサブカテゴリーである日常生活・夫婦生活における夫婦の一致性得点、夫婦関係の満足感得点を算出した。
3)親役割の受容：12 項目各々につき、「とてもあてはまる」(5 点)「全くあてはまらない」(1 点)として得点化し、総得点を算出した。積極的・肯定的項目、消極的・否定的項目とも、得点が高い方が、親役割をよく受容できていることを示している。
4)父親の育児・家事への参加の程度：８項目各々について、「毎日する」(5 点)、「週２-３回する」(4 点)、「週末のみする」(3 点)、「たまにする」(2 点)、「全くしない」(1 点)として得点化し、総得点を算出した。
5)母親の職業観：表１に示した８つの理由のいずれを選択したかによって、表２に示した６群に類型化した。

■　結果および考察

１．父親・母親の比較
１)親となることによる発達
「親となることによる発達」の各因子および全体の平均得点は、表３に示した。t 検定の結果、表３に示した各因子について、父親よりも母親の方が有意に高い得点を示した。この結　果は、柏木・若松(1994)を支持するものであり、昼夜、子供にかかわり子育てに携わっている母親は、相対的に子供に関わることが少ない父親よりも、親となることによる発達感を強く体験していることが示唆された。
２)親役割の受容
親役割の受容得点は、表４に示した。t 検定の結果、母親よりも父親の方が有意に高い得点を示し、父親の方が親役割をよく受容できていることが示唆された。特に、消極的・否定的意識は、父親に比べて母親の方がかなり高かった。これは、一般的に育児の主責任者であり、子供に関わることの多い母親の方が、子育ての大変さやストレス、育児による制約感などの否定的側面をよく体験し、認知しているからであろうと考えられる。
また、母親の職業の有無別に分析したところ、表５、表６に示したように、無職群では、父親に比べて母親は、消極的・否定的意識が有意に高く、全体的な親役割の受容意識も有意に低かった。積極的・肯定的意識は、有職群・無職群とも大きな相違は見られないのに対して、消極的・否定的意識は、無職の母親では強く体験されていた。この結果は、有職の母親は、職業という育児とは別の世界をもっていることにより、育児の否定的意識、特に育児による制約感が軽減されているためであろうと考えられる。
３)夫婦の調和性
夫婦の調和性得点は、表７に示した。t 検定の結果、そのうち、夫婦関係の満足感において、母親よりも父親の方が有意に高得点を示した。
４)父親の家事・育児参加
父親の家事・育児参加について、t 検定の結果、母親よりも父親の方が、父親の家事・育児参加度を高く認知していること、つまり、父親の家事・育児参加の程度は、妻の夫に対する認知・
評価よりも、夫の自己認知・評価の方が高いことが示された。

２．母親の親としての発達を支える要因の分析
次に、親役割の受容、夫婦の調和性、夫の家事・育児参加、母親の職業観と、親としての成長・
発達感の関連性について検討した。
１)親役割の受容との関連性
母親役割の受容得点の平均値 41.01 よりも得点の高い者を高群(45 名)、低い者を低群(46 名)として、親の発達感得点との関連性を検討した。表８に示したように、自己抑制、運命・伝統・信仰の受容、.生きがい・存在感の各因子および総得点において、親役割低受容群よりも高受容群の方が、有意に高得点を示した。
さらに、母親の職業の有無別に分析したところ、表９に示したように、無職の母親、妻有職の父親に、この傾向が強く認められた。つまり、無職の母親、妻有職の父親は、親役割をよく受容できているほど、親としての発達感が高いことが示唆された。無職の母親は、父親や

有職の母親よりも、日々、子供に関わる時間が長く、日常生活の中で育児に関する葛藤をより多く体験していると推察されるが、このような状況の中で親役割を受容できたとき、親としての発達感を体験できると考えられる。また、有職の妻をもつ父親は、専業主婦の妻をもつ父親よりも、育児に関わることが多いと推察されるが、育児に関与することによって、育児の負担感・制約感などの否定的な意識も体験される。有職の妻をもつ父親の親役割の受容は、このような否定的意識を克服した結果であり、そのことが親としての発達感を高めることは、非常に妥当なことであると考えられる。

２)夫婦の調和性との関連性

母親が認知した夫婦の調和性得点およびサブカテゴリーである夫婦の一致性得点、夫婦関係の満足感得点を、それぞれ平均点以上を「調和性高群」、平均点以下を「調和性低群」として、親となることによる発達感との関連性を検討した。t 検定の結果、全体としてみた夫婦の調和性高群と低群の間には、 .柔軟性、視野の広がり、生きがい・存在感の各因子について、高群が低群よりも高い傾向がみられた。夫婦の一致性については、高群が低群よりも有意に高い得点を示した(t=2.90,P<.01)。夫婦関係の満足感については、両群間には有意差は認められなかった。

さらに、母親の職業の有無別に分析したところ、有職群の母親のみ、正の相関が見られた。つまり有職の母親は、夫婦の調和性が高いほど、親としての発達感を高く体験していることが示された。

３)夫の家事・育児への参加度との関連性

夫の家事・育児への参加の程度と、親の発達感については、妻無職の父親にのみ、関連性が見られ、専業主婦の妻をもつ父親は、家事・育児に関わることによって親としての発達感が高まることが示唆された。

４)母親の職業観との関連性

母親の職業の有無と親の発達感の間には有意な関連性は見られなかった。しかしながら、母親が職業に就いている/または就いていない理由別に分析すると、両者の間には著しい関連性が認められた。

表２の基準にしたがって分類した母親の職業観のタイプと親の発達感得点の関連性を検討したところ、表 10 に示した各因子において、有意差が認められた。特に、 .自己抑制、 .生きがい・存在感の各因子、および全体の得点においては、A 積極群(無職)、D 自己実現重視群 (有職)が、C・F 消極・不満群よりも有意に高得点を示していた。この結果は、職業の有無にかかわらず、積極的・主体的に職業に就くこと、または就かないことを選択し、そのことの意義を認めている母親は、親としての発達感も高いことを示している。反対に、職業の有無にかかわらず、その様態に不満である母親は、親としての発達感も低い。したがって、この結果より、親としての発達感を支えるものは、職業の有無ではなく、その様態をいかに主体的に選び取り、意味付けるかが重要であると考えられる。

また父親の場合も、妻の職業観によって、親の発達感に大きな相違が見られた。特に、有職の妻をもつ父親は、D 自己実現重視群が F 消極・不満群よりも、すべての因子において有意に高い発達感を示していた。これは、母親本人と同様の傾向を示す結果であった。

３．各要因間の関連性の分析

最後に、親の発達感を促進する要因と仮定して、本研究で検討した各要因、 親役割の受容、 夫婦の調和性、 父親の家事・育児参加、母親の職業観の相互の関連性を検討した。図１ ４に示したように、母親 (妻)の職業の有無によって、これらの影響の仕方には大きな相違が見られた。

無職群の母親は、 親役割の受容、 夫婦の調和性、 職業観(就労しない理由)、 父親の育児・家事参加と、親としての成長・発達感の間に(図１)、また有職群の母親は、 夫婦の調和性、 職業観と、親としての成長・発達感の間に、正の相関が見られた(図２)。

妻無職群の父親は、 育児・家事参加、 妻の職業観(就労しない理由)と、親としての成長・
発達感の間に(図３)、妻有職群の父親では、夫婦の調和性、 親役割の受容、 妻の職業観と、親としての成長・発達感の間に正の相関が見られた(図４)。

つまり、妻が有職の家庭と専業主婦の家庭とでは、親の側の成長・発達感や育児への積極的関与を促進する要因には、異なる特徴が見出された。 母親が有職の家庭では、夫婦関係のあり方が、専業主婦の家庭では、父親の育児・家事参加が重要な要因であることが示唆された。

４．全体のまとめと考察

本研究は、育児による親の発達を支える家族要因について、心理学的な視点から分析したものである。本研究の結果をまとめると、次のような点が示唆された。

①.全体的にみると、父親よりも、日々、直接、育児に関わることの多い母親の方が、親の発達　感は有意に高かった。これは、先行研究を支持する結果であった。

②しかしながら、母親の職業の有無によって、親の発達感に影響を与える要因には、相違が　認められた。母親が無職の家庭では、父親の家事・育児参加が、母親が有職の家庭では、夫　婦の調和性が、親の成長・発達感に影響する重要な要因であることが示唆された。また、母親の職業観も、母親本人のみならず父親の発達感にも影響を及ぼすことが示された。

少子高齢社会を迎えた我が国では、結婚・出産後も子育てと職業を両立しようとする傾向は、今後、ますます増大していくことであろう。しかしながら、よりよい子育てを実現していくためには、親の側も育児に積極的に関与し、自らにとっても育児の意義を実感できる体験が不可欠である。本研究の結果より、以下の点が示唆された。

まず、夫婦で子育てを行うことの重要性である。これは、昨年度の研究からも示唆されたことであるが、母親だけでなく、父親も主体的・積極的に子育てに関わることが、子育ての否定的意識を軽減するのみでなく、父親・母親自らの発達につながるのである。

また、母親の職業観、つまり職業に就く理由、就かない理由は、職業の有無以上に、親としての発達にとって重要な要因であることが示された。職業に就くこと・就かないことをいかに主体的に選び取り、その意義を積極的に認められるかが、母親本人のみならず、夫の父親としての発達感にも影響を及ぼすのである。ライフサイクルの中に占める育児期の比率が相対的に減少した今日、夫も妻も子育てと職業を自らの人生の中にどのように組み込み、両立させていくかが、重要な課題であると考えられる。

文　献

1)柏木惠子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試　み．　発達心理学研究,5,72-83.
2)数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 1996　子供の発達と母子関係・夫婦関係：幼児をもつ家族について．　発達心理学研究,7,31-40.
3)牧野暢男 1996　父親にとっての子育て体験の意味．牧野カツコ・中野由美子・柏木惠子(編)子供の　発達と父親の役割．ミネルヴァ書房，Pp.50-72.
4)大日向雅美 1988　母性の研究．川島書店.